放課後異世界部

朋川禾弥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
放課後異世界部

【Ｎコード】
Ｎ３０９７ＢＡ

【作者名】
朋川禾弥

【あらすじ】
普通の女子高生ヒナは何故か放課後、異世界でアルバイトをする事に。
ゆるい異世界物始めました。

1話

私立らしさを兼ね備えた大きな門を開放し生徒で賑わう朝の正門。
ある四人の生徒が歩けば皆が道をあけて見入った。

「まぁ、異世界部の方々よ」

「今日も皆さん素敵ね」

「本当、とっても近寄りがたいわ」

学園自慢の制服に身を包み颯爽と歩く
彼ら四人はこの学園では有名人的な扱いを受けていた。

容姿もさることながら家柄や成績など全てが完璧なのであったりと
何かと話題に事欠かない三人の男子生徒と、学園一の美少女。

それが彼ら”異世界部”の部員である。
四人を見守っていた一人の生徒がふと呟いた。

「でも異世界部って何をやっているのかしら？」

「さぁ？」

「私も入ってみたい」

「私も！」

女子生徒たちが楽しそうに騒ぐ横をすり抜けるように歩く一人の生徒は
心の中で呟いた。

（そんないいもんじゃないのに）

すると後ろから同じクラスの友達が声をかけてきた。

「ヒナ、今日は異世界部だっけ？」

学内の有名人ばかりが集う異世界部にただ一人ごく平凡な生徒がいた。
それがヒナだった。

異世界部の部員である水野ヒナは他の部員と離れて登校していた。

「う、うーん・・・そうだっけ・・・」

今日金曜日は異世界部の活動日なのだが、
現実を見たくないがために曖昧に答えた。

にもかかわらず早々現実に引き戻される事になった。

「おーいヒナー！！」

「げっ流依先輩っ」

異世界部の部長を務めている宇都宮流依が大勢の生徒に囲まれた中こっちに向かって手を振っている。

見つからないようにコソコソと学校に入ろうとしていたのに見つかってしまった。

「先輩が呼んでるよ？」

「聞かなかったことに・・・・・」

「先輩が手を振ってる・・・いいなぁ」

彼は特に女子生徒に人気が高かったりする。

「ヒーナー！！」

無視されようとしているとは気付かない流依は、ヒナに気付いて貰うために更に手を大きくブンブンとふり乱した。

とっても嬉しそうに。

クールだと思われがちな彼は実はとても親しみやすい人物だったりする。

流依が手を振り名前を呼ぶので自分まで注目される結果になった。
ヒナは注目されるのが大の苦手なのだ。
そんなヒナの心情をしるよしもない流依は満面の笑みで言った。

「今日は異世界部だぞっ☆」

その笑顔がとても腹立たしい。、
いっそのことあの綺麗な顔をぶん殴ってやりたい衝動に駆られた。

私はある事件のせいでこの怪しい部活に入ることになったのだ。
ある事件というのは放課後、吸い寄せられるように
物置として使われている部屋に立ち入った・・・ことが失敗だった。
普段は鍵がかかっているハズなのにドアは開いていたのだ。

中に入ると鏡が目に入った。
随分掃除されていないはずだが埃がたまっているのは枠のみで、
薄暗い部屋の中妙に鏡自身がなんとも言えない存在感を放っていた。
普段のヒナは怖がりのはずで暗いところが苦手なはずだが
何故か室内に一歩を踏み出してしまった。

不思議に光る鏡に魅入られるように。
”触れてみたい”そんな衝動にかられてしまった・・・。
そして手を伸ばしたその時指は鏡をすりぬけ我に返った。
これはヤバイ。
一気に恐怖に駆られるが意思とは反対にどんどんからだが鏡へと引き込まれる。

「ちょっと、何これ!?」
開け放されたドアを見る。誰もいない。
「誰か助けてーーーー!!!!」
それでも必死に声を上げた。
「もがーーーーーーーーーーーーーーーーー!!!!」

「もが?」
「クスクス」
「え?」

必死になりすぎて目を瞑っていたらしい。
目を開けると学校の有名人四人と

「全員そろったようだな」

銀色の髪に白く重そうなローブを纏い大きな杖を持った
いかにも魔術師風の格好をした男がたっていた。

しかもさっきまで学校の室内にいたはずなのだが、
今いるのは円形のホールのような部屋だった。

これが始まりだった。

2話

「何々？どうなってるの！？」

銀髪の怪しい男は別にして、他の四人は紛れもなくウチの学校の生徒。

ということは

「ここは学校？」

「いや、違う」

そういったのは眼鏡をかけた生徒、小笠原拓斗。
クールで大人びた雰囲気を醸し出している。
宇都宮家と並ぶ大企業の御曹司でもある。

「まだ俺達も説明を受けていないんだ。
ただいえる事は皆鏡を伝ってここにきてしまったらしい」

「そんな！？じゃあここは何処なんですか！？
学校にいたはずなのに学校じゃないなんて信じられない」

「信じられないんだったらソコの窓から外を眺めてみたらどうだ」

言われて窓まで駆けていき、窓の外を眺めた。
そこに広がっていたのは見なれた学校近辺の風景ではなく
美しい自然の広がった景色と中世ヨーロッパを彷彿させる町並みと
塔が目に入った。
見降ろしてみると自分が今いる場所も何かの塔だという事が分かった。

「な・・・何これ・・・・・」

動揺しているヒナの肩に手を置く人物がいたので振り返ると
学園の女子の憧れである高城流依がヒナの目を見つめた。
学校の女子の間で大人気な彼の顔立ちは
男子生徒に興味のないヒナですら宇都宮流依が男にしては
綺麗すぎる容姿の持ち主だという事は理解できた。
そんな宇都宮流依はヒナに向けて言葉を発した

「そっちの窓からは城が見えるぞ！」

それも目を少年のようにキラキラと輝かせて。
しかし状況を受け入れきれないヒナにはとても見に行く気は起きなかった。

「皆あの教室の鏡からこの異世界に来たうちの学校の生徒というのは間違いない」

小笠原拓斗はなおも冷静に説明をしてくる。

・・・異世界・・・皆鏡に吸い寄せられて・・・。

「うん、直接は知らないけど皆見たことある人ばっかり・・・」

知らない場所に紛れ込んだのは自分一人ではない。
それが唯一の支えだった。

「という事で自己紹介だ！」

宇都宮流依は張り切って言った。
さっそく仕切ろうとしている。

「まて、ようやく揃ったのだアナタ達が
ここへ召喚された経緯を説明させてくれないか？」

そこで魔術師風の男がようやく話に割り込んだ。

「おおーそうだった！！」

宇都宮流依はやはり楽しそうに向き合った。

「ずっと気になってたのに忘れてたわぁ」

学園一の美少女だと言われている月島絵莉依がおっとりと微笑む。

「うむ、聞いてやらんでもない」

小笠原拓斗が腕を組んで頷いた。何だか無駄に偉そうだ。

「・・・あ・・・あぁ、ありがとう」

（やりずらそうだなぁ・・・）

どうやら不安がっていたのは自分だけだったようで

他の４人の無駄な落ち着きようをみてヒナ自身もようやく落ち着くことになった。

（現実だとこんなもんなのか・・・この人達が神経図太すぎるのか・・・）

「あなた達をここに呼んだのは我が国を救ってもらうためだ」

そこでようやく最後の一人が口を開いた

「来た来たお約束」

彼は吉原レン、三人とは別の意味で有名な彼は長身でオレンジの髪
威圧的で見た目が不良っぽく、出来るなら怖くてかかわりたくない
先輩ナンバー1だった。

「頑張ります！！」

宇都宮流依は張り切って答えた。

「まだ何も聞いてないだろ」

小笠原拓斗が突っ込んだ。
この二人はよく一緒にいる事で有名だが
ボケとツッコミでなりたっているのかもしれない。

3話

「・・・続けてもいいか・・・？」

クロードと名乗った怪しい銀髪の男は少し困り気味に訪ねてきた。

・・・・本当にやりずらそうだと、ヒナは少し同情した。

「私の名はクロード。この国セレスティアで魔導師を統括している。

我が国は長年魔法に頼ってきたが、

近年魔力を持ちながら産まれてくる人間が減少してきている。

その限られた人間も昔に比べると持つ魔力の力が弱まっている。

この国は魔力で防壁を作っていたがお陰で魔力の防壁が弱まる一方だ

そこであなた達を呼んだ」

「えっ私、普通の女子高生なので魔法なんて使えませんっ

・・・って、一度言ってみたかったのよね～」

月島絵莉依が言った。

「何処で使うつもりだったんですか・・・」

ヒナは恐る恐る聞いてみた。

「ほらぁ、こんな事もあろうかと頭の中でシュミレーションしてたのよ」

「どんなシュミレーションですか！？」

（何、この子可愛い顔して実は妄想壁のある結構痛い子！？）

密かに憧れていただけあって意外な一面に少しショックを受けてしまった。

「四つの動力装置があり、魔術師達が魔力を放出している。
そこに魔力を送り込んでほしい。
動力装置はそれぞれ四つの塔に設置していて
我が国の魔導師達に合わせてただ詠唱して貰うだけでいい。」

クロードは今度は断りもせずに話を続けた。
どうやら諦めたらしい。

「なんか想像してたより地味だな」

「そりゃー戦争経験ない俺らが何かと戦うなんて絶対無理だしよ」

吉原レンが意見した。

何だか一番まともそうな事を言っている気がする。

「しかし俺達は魔法など使った事は一度もないぞ？
そもそも俺達の住む世界に魔法が存在していない。」

「いや、あなたがたからは強い魔力の波動を感じる。
ただ使い方をしらないだけで。
動力装置には魔力の媒介となる人間が魔法陣の中で詠唱すれば
使い方が分からずとも自然と魔力を吸い上げる仕組みになっている。

そして早速今夜魔力放出をお願いしたい。
一夜明けたら元の場所と時間に戻すことを約束する。
それまではゆっくりしていてくれ。部屋を案内させる。」

小笠原拓斗の質問にクロードが答えた。

「俺今日バイトあるからたっぷり寝かしてもらってから
戻してもらっていいっすかー？」

吉原レンが手を上げていった。

やっぱりマイペース集団の一因のようだ。
しかもヒナ達の通う学校は校則でアルバイトは禁止されているはず
だが。

「待って下さい！！」

ヒナも手を上げた。

「それってタダでやれってことですか！！？」

出来る事ならこんな面倒な事に関わりたくない。
そういう思いだったのだが口からでたのはこの言葉だった。

これがヒナの出来る唯一の抵抗だった。

「ああ、すまない。言うのを忘れていた勿論報酬はとらせる」

「マジ！？俺バイト辞めていいってこと！？」

吉原レンは嬉しそうに声を上げた。

「報酬というのはどういうものだ？
こちらの通貨を渡されたところで意味はない」

「じゃあ宝石とか？」

「日本円を銀行振り込みならいいんだけどなぁ」

口々に話す桜華学園生徒にクロードは逆に質問を返した。

「そちらの国では金(キン)や鉱石は価値のあるものだろうか？」

「ふむ、金か。ウチの家は宝石商を営んでいてな
貴金属や宝石なら換金して皆に配れるが
それに俺はそこらの一般庶民とは違いアルバイトなどしなくても
庶民とは比べ物にならん裕福な生活が保障されているから、
本来バイト料など興味ないんだが」

小笠原拓斗の言葉に宇都宮流依も頷いた。

「そうだな、基本俺らは普段カードで買い物してるしな。」

（やな感じ！！）

ヒナはそんな二人を睨んだ。

「しかし、これは現金ではかえられない、価値のある経験だ！
頑張ろうな！」

ヒナの心情を知らぬ宇都宮流依は目を輝かせながら言った。

（この人・・・こんな面倒臭い人だったんだ・・・しらなかった）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3097ba/

放課後異世界部

2012年1月9日01時50分発行